学 位 論 文 審 査 の 要 旨

学位申請者	高橋　彰子 生活工学共同専攻2016年度生	論文題目	近代日本における住宅の断熱 ー 断熱概念の受容から建築家による実用まで ー
審査委員	主　　査: 元岡　展久　教　授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否　：　否
	副　　査: 藤田　盟児　教　授（奈良女）		「否」の場合の理由
	副　　査: 長澤　夏子　准教授		□ ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員: 大瀧　雅寛　教　授		□ イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員: 久保　博子　教　授（奈良女）		□ ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
			■ エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
			□ オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
学位名称	博　士　（工学）		※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について
（英語名）	（Ph. D. in Architecture）		

学 位 論 文 審 査 ・ 内 容 の 要 旨

本研究は、近代日本の住宅の断熱について、断熱概念の萌芽期、断熱研究の萌芽期、断熱実用の萌芽期の状況を明らかにしたものである。これまで断熱の歴史は、断熱材の生産史として扱われ、その始点は1960年頃とされていた。しかし生産に先立って、断熱の価値を理解し、断熱によって生活改善を図る思想や、住宅デザインと断熱を総合的に考える視座が、断熱研究や断熱実用の根底にあったことを見逃してはならない。本研究では、断熱の実例のみならず、断熱概念や断熱研究に着目し、これまで断熱の歴史で注目されていなかった明治期から1950年代までの日本の住宅の断熱を対象として、その受容の過程を詳細に分析した。

研究の前半では、明治期ならびに、大正末期から昭和初期にかけての断熱をめぐる状況を明らかにし、後半においては、1930年代と1950年代の建築家の断熱に対する思想と断熱材の使用手法を分析している。当該時期の研究論文や建築専門誌における図面資料をもとに、室内環境や断熱に関する言説、ならびに住宅に用いられた断熱の構法について詳細に検討を加えた。その結果、日本における断熱の受容過程において、明治期はドイツ衛生学より断熱概念を獲得した時期であり、大正末期から昭和初期は、日本の気候と慣習に適した断熱方法を模索しながら、建築の断熱や伝熱学に関する基本的な知見を得た時期とした。1930年以降は、性能が不十分な断熱材を試行錯誤しながら実験的に用いた時期であり、50年代に入って先駆的な建築家による実用が始まるとした。近代日本の建築家によって先駆的に断熱材導入を実践した例も詳細に分析されており、これら個別の研究や住宅事例を断熱の視点で横断的に俯瞰することで、建築意匠史にも新たな視点を与えている。

本研究は、日本における断熱技術の受容と展開に新たな知見を与えるとともに、断熱研究事例と住宅実践事例の両面の検討によって、断熱による生活改善という視点から、日本近代住宅の室内環境と住宅デザインを総合的に評価するという独自の有意義な分析となっている。